



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高齢者の自伝的記憶におけるバンブと記憶内容
Author(s)	槇, 洋一; 仲, 真紀子
Citation	心理学研究, 77(4), 333-341
Issue Date	2006
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44683
Type	journal article
File Information	naka_116_1.pdf



高齢者の自伝的記憶におけるバンブと記憶内容

榎洋一 仲真紀子 北海道大学

Reminiscence bump and contents of autobiographical memory in Japanese elders

Youichi Maki and Makiko Naka (Hokkaido University)

A reminiscence bump is a phenomenon that people typically remember the events experienced the ages of 10 and 30 more often than these experienced in other period. This paper investigates (1) whether a reminiscence bump is found in autobiographical memory in Japanese elders, and (2) the features and content of autobiographical memories in general and in the bump. Twenty-five participants more than sixty-years old recalled past events using a cue-word method, described the content of each memory, dated the event, and rated the features of the memory on five scales, i.e., vividness, importance, present self-involvement, past self-involvement, and frequency of recall. The results showed that although a reminiscence bump emerged, memories within the bump did not differ from other memories in terms of rated features nor in content. Approximately 50% of autobiographical memories were "self-centered", 30% were about "self-other relations", and the rest were "other-centered" and "scenes" which did not involve people. The results were discussed in relation to theories about the reminiscence bump.

Key words: autobiographical memory, elders, reminiscence bump, cue-word method, contents of memory.

The Japanese Journal of Psychology
2006, Vol. 77, No. 4, pp. 333-341

自伝的記憶は日常記憶の一種として、1970年代以降、主に認知心理学の分野で研究が行われてきた（佐藤（2002）によるレビュー等）。その関心の一つに、個人のライフスパンにおける記憶の分布に関する問題、つまり、どの時期に経験した出来事が、どの程度再生されるのかという問題がある。

この問題を調べる典型的な手続きは、手がかり語法（cue-word method）である。この方法を用いた研究では、研究参加者に手がかり語（例えば、水）を示し、その語から想起される出来事の年月日を報告させる（出来事の内容は尋ねないのが普通である）（Crovitz & Schiffman, 1974）。このようにして報告された記憶内容を、生まれてから現在までの時間軸上に布置すると、想起時期の分布に三つの特徴が見られる（Rubin & Schulkind, 1997a, 1997b）。

第1の特徴は、最近の出来事ほどよく想起され、現在から時間が離れるほど、出来事の想起率が低下するという傾向である。これは一種の新近性効果であり、最近10年間の記憶の想起によくあてはまる。第2の特徴は、幼児期健忘であり、0歳から5歳までの記憶

の想起量が非常に少ないという現象である。第3の特徴として、10代から30代の出来事の想起量が多いという現象がある。この現象はこぶのように見えることからレミニセンス・バンブ（reminiscence bump）、または単にバンブと呼ばれている（Rubin, Wetzler, & Nebes, 1986）。バンブは新近性効果や幼児期健忘とは異なり、いわゆる忘却曲線上に表すことができない。そのため、バンブを構成する記憶の特徴を明らかにすることは、自伝的記憶を理解する上で重要な課題だとされ、研究が進められてきた。

本研究の目的は、手がかり語法（Galton, 1879）により想起された記憶の内容を調べることである。そうすることにより、自伝的記憶、特にバンブを構成する記憶の特徴を明らかにし、バンブの形成にかかわる要因について考察することである。以下、バンブについて明らかにされていることを整理し、なぜバンブを含む自伝的記憶の内容に迫ることが必要であるのかを説明する。

一般に、バンブは高齢者において頑健に見られる（Rubin, Rahhal, & Poon, 1998; Rubin & Schulkind, 1997a, 1997b）。ただし、出来事が最もよく想起される時期、すなわちバンブのピークは20代であるとする研究が多い（Rubin & Schulkind, 1997a, 1997b）。しかし、現在から2年半以前の出来事を想起するように

教示すると、ピークが 10 代前半に移動することを示した研究がある (Jansari & Parkin, 1996)。また、移民や内戦を経験した人では、その時期にピークがあるとする研究もある (Conway & Haque, 1999; Schrauf & Rubin, 1998)。このように、手がかりやコホートの影響も受けるが、ピークの位置は概ね 10 代から 20 代にあるといえるだろう。

手がかり語法を用いた研究だけでなく、特定の内容の出来事を想起させる方法でもバンブが生じる。例えば個人にとって重要な出来事 (Fitzgerald, 1988; Rubin & Schulkind, 1997a)、鮮明な出来事 (Cohen, Conway, & Maylor, 1994; Fitzgerald, 1988)、感情を伴う出来事 (Berntsen & Rubin, 2002; Rubin & Berntsen, 2003) を想起させた研究において、バンブが生じることが報告されている。また重大な社会的事象 (Cohen et al., 1994; Schuman & Scott, 1989) を想起させた研究においても、バンブが生じることが示されている。

このように、種々の記憶においてバンブが生じることが確認されている。しかし、バンブに含まれる記憶の内容が他の時期の記憶とどう異なるのかという点については、必ずしも明らかではない。例えば Jansari & Parkin (1996) は、手がかり語法によって想起された記憶について、重要性や鮮明さを評定させた。その結果、バンブの時期に含まれる記憶とその他の時期の記憶の間では、評定に差は見られなかった。Rubin & Schulkind (1997a) らも同様の結果を得ている。

以上をまとめると、高齢者においてはバンブが頑健に生じること、バンブのピークは概ね 10 代から 20 代であること、様々な記憶においてバンブは生じるが、バンブの記憶が他の時期の記憶と異なるのかどうかは必ずしも明らかではないことが確認されている、といえるだろう。本研究では、手がかり語法によって想起された記憶の内容に迫り、バンブの記憶が他の時期の記憶と異なるのか、異なるとしたらどういった違いがあるのかを探る。

自伝的記憶の内容に関する研究としては、Elnick, Margrett, Fitzgerald, & Labouvie-Vief (1999) が、40 代から 70 代を対象に、個人にとって重要な出来事に関する記憶を想起させ、バンブの時期 (20 代) の記憶内容を分析した。その結果、どの世代の個人においても、バンブの時期の記憶には家族との思い出が多かった。

また、Holmes & Conway (1999) では、バンブの前期である 10 代では公的な出来事が多く想起され、バンブの後期である 20 代では私的な出来事が多く想起された。このことから、彼らはバンブは二つの構成素からなるとし、前期はアイデンティティの形成、後期は配偶者や子どもとの親密な対人関係を反映していると考察している。

しかし、Elnick et al. (1999) ではバンブの時期に含

まれる記憶と他の時期の記憶が比較されていない。また Holmes & Conway (1999) では公的、私的ということ以外には記憶の内容が詳しく検討されていない。さらに両研究に共通することとして、特定の内容の出来事を想起させる方法が用いられていることが指摘できる。そのため、バンブ研究で多用されてきた一般的な手がかり語法による記憶はどのような内容が想起されるかという疑問に答えることができない。

本研究では、バンブとその他の時期にどのような違いがあるのかを検討する。まず、これまで日本でバンブが生じることを報告した研究はほとんどないので、日本の高齢者にもバンブが生じるかどうかを手がかり語法により検討する。バンブが生じることが確認されたら、バンブおよびその他の時期の記憶について、その特徴や内容を比較検討する。検討する特徴としては、これまでも問題にされてきた“鮮明さ”、“重要性”、“リハーサルの程度”、“想起した出来事に対する現在および過去の評価”を取り上げる。しかし最も重要な目的は、想起された記憶の内容を記述することである。Holmes & Conway (1999) や Elnick et al. (1999) が示唆するように、バンブの時期は他の時期に比べ、自己や家族に関する記憶が多いのだろうか。このことを調べるために、手がかり語に対する想起内容に自己と他者がどのくらいの頻度、割合で登場するのかということを探索的に分析する。

方 法

参加者 都内の保険福祉センターに協力を求め、調査への参加を呼びかけた。調査の承諾が得られた 61—82 歳の高齢者 31 名 (男性 21 人、女性 10 人、平均年齢 70.7 歳) が調査に参加した。

刺激材料 Rubin, Schrauf, & Greenberg (2003) から 25 語、Robinson (1976) から 25 語、小川・稲村 (1974) からイメージ容易性の高い 50 語を選び、合計 100 語を刺激として用いた。水、母、本、火、海、植物、友達、タバコなど 1—3 文字からなる名詞であり、通常の表記に従い、漢字、ひらがな、カタカナで提示した。

手続き 調査期間は 2001 年 10 月から 12 月であり、調査員は筆者ら、大学生、大学院生および社会人からなる調査員であった。調査員はセンターに通い、参加者と個別に面接を行い、データを収集した。参加者の負担を考慮し、1 回の面接時間は 1 時間程度とし、その間に手がかり語法による記憶の再生と想起内容に関する質問を行った。1 回の面接が終了するごとに次のアポイントメントを取った。面接を繰り返すことにより、最高 100 個までの記憶を収集することを目指した。

教示は、“○○ (手がかり語)” という単語を見てください。生まれてから今このときまでの間で、○○に

関して、思い出す出来事がありますか。”であった。調査は手がかり語ごとに、以下の手順で行った。ただし、最初の1題は練習項目とした。

まず、A4判の用紙に印刷された手がかり語（例えば、木）を口頭で読み上げながら呈示する。参加者が出来事を思い出したら、内容を報告するよう求める。その際、用紙の記録欄が20文字の升目からなることを示し、口頭による簡略な報告を求めた。そのとき、必ずしも20字以内で収めなくてはならないわけではなく、多少超えても構わないことを伝えた。面接者は参加者の目の前で報告の要旨を用紙に記録した。

次に、出来事が起きた時期を尋ね、記録する。記録にあたっては“昭和〇年”，“〇歳だった頃”，“子どもが〇歳だった頃”などの表現を尊重し、後で生年月日から年代を割り出した。

引き続き、想起した出来事の特徴を7件法で評定させた。質問項目はQ1“どのくらい鮮明に思い出せますか”（1全く鮮明でない—7非常に鮮明に）、Q2“自分にとってどのくらい重要でしたか”（1全く重要でない—7非常に重要である）、Q3“どのくらい繰り返し思い返しましたか”（1全くない—7非常に頻繁に）、Q4“その当時の気持ちはどうでしたか”（1非常に悪い—7非常によい）、Q5“そのことを振り返ったときの現在の気持ちはどうですか”（1非常に悪い—7非常によい）の5項目であった。

以上の手続きを単語ごとに繰り返した。手がかり語に対して何も思い出せない場合は、次の手がかり語へと移った。

このほか、十分なラポールがとれたと考えられる時点で、主観的な健康感について7件法で評定を求めた。質問項目は“今の自分はどのくらい健康だと思いますか”（1とても不調だ—7とても良好だ）、“普段の生活の中で、体の調子が良くないために不便さを感じることがありますか”（1全くない—7とてもよくある）の2項目であった。

結 果

一つの手がかり語に対する反応には5—10分を要し、1回の面接ではおよそ5—6個の手がかり語に対する反応を得た。手がかり語は100個用意したが途中で調査への参加を継続できなくなった参加者もいたために、想起された記憶の数にはばらつきがある。全参加者31人から得られた総記憶個数は1167、平均記憶個数は37.6（範囲4—100、 $SD=32.9$ ）、平均面接数は5.5（範囲1—20、 $SD=5.3$ ）であった。

以下、10個以上の手がかり語に対して想起を行った25人（男性17人、平均年齢70.5、範囲63—82、 $SD=5.2$ ；女性8人、平均年齢73.3、範囲61—79、 $SD=3.7$ ）から得られた資料を対象とし、分析を行う。25人分の総記憶個数は1123、平均記憶個数は45.5（範囲10—100、 $SD=31.9$ ）、平均面接回数は6.6（範囲2—20、 $SD=5.8$ ）であった。そのうち、1年以内の記憶143個を直近の記憶とし、分析対象から除外した。したがって、総記憶個数は980である。

なお、主観的健康感については“今の自分はどのくらい健康だと思いますか”への評定平均値は3.9（ $SD=1.6$ ）、“普段の生活の中で、体の調子が良くないために不便さを感じることがありますか”への平均評定値は3.3（ $SD=2.2$ ）であり、調査に支障をきたすような身体的、精神的問題のある人はいなかった。

想起された時期 Rubin & Schulkind (1997a, 1997b) の分析法に従い、個人ごとに記憶個数を10年間隔（10代、20代、30代等の時期）で集計し、その個人の総記憶個数で割った値を各個人の各時期における記憶の生起率とし、各時期における記憶の生起率を求めた（Figure 1）。時期を独立変数とし、想起の生起率を従属変数とする一元配置分散分析を行った。分散分析においては、先行研究と同様に、10歳未満と60代以上の記憶を除外した。その理由は、幼児期健忘と新近性効果の影響を除くためである。そのため、時期の水準は10代、20代、30代、40代、50代である。

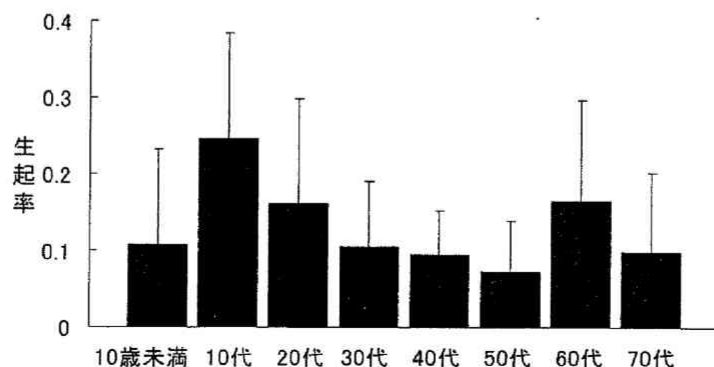


Figure 1. ライフスパンにおける想起された出来事の生起率。
10歳未満と60代、70代の生起率は分析から除外した

その結果、時期の効果が認められた ($F(4, 120) = 10.88, p < .001$)。多重比較 (Tukey) の結果、10 代の出来事は他の四つの時期の出来事よりも多く想起され ($p < .05$)、20 代の出来事は 50 代の出来事よりも多く想起されることが示された ($p < .05$)。つまり、先行研究と同様、10 代、20 代の記憶にバンブが認められた¹。

記憶の特徴 鮮明さ (Q1)、重要性 (Q2)、想起の繰り返しの程度 (Q3)、出来事に対する過去の評価 (Q4)、現在の評価 (Q5) については、各個人の各時期の記憶に対する平均評定値を算出した (Figure 2)。

想起の生起率と同様に、鮮明さ、重要性、繰り返しの程度、過去評価、現在評価の各質問項目についても、10 年間隔 (10 代、20 代、30 代等の時期) で集計し、各時期における平均値を求めた。鮮明さ、重要性、想起の繰り返しの程度について、時期 (10 代、20 代、30 代、40 代、50 代) を独立変数とし、それぞれの時期の平均評定値を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、鮮明さ、重要性、繰り返しの程度の各質問項目において有意な主効果は認められなかった ($F(1, 120) = 1.76, ns$; $F(1, 120) = 1.14, ns$; $F(1, 120) = 1.17, ns$)。また、出来事に対する過去と現在の評価を繰り返しの要因とみなし、時期を独立変数とする分散分析を行ったが、時期にも過去・現在の評価にも有意な主効果は認められなかった ($F(1, 120) = 1.28, ns$)。鮮明さ、重要性、想起頻度、過去および現在の評価は、時期によらず概ね 4 (どちらでもない) - 6 (かなり鮮明である/かなり重要である) の範

囲にあった。つまり、先行研究と同様、バンブに含まれる記憶が特に特徴的であるというわけではなかった。

自伝的記憶の内容

カテゴリー化 Holmes & Conway (1999) や Elnick et al. (1999) らの先行研究を踏まえ、自己や他者に関する記憶を以下の要領で分析した。また、どんな時期にどんな内容が想起されやすいのを見るためにカテゴリー化の際には直近の記憶を除外せずに 1123 個の想起を用いた。

まず 100 個の記憶について、(a) どのような人物あるいは対象が登場するか、(b) 人物が主格で登場する場合、その主体は誰か (自己か他者か)、(c) 自己が主体である場合、それは自己のみの行為か、他者との行為かに注目して仮分類を行った。その結果、登場する人物、対象としては、自己、他者 (母、父、兄、姉など) のほか、事物、動物、植物、環境、社会的な出来事、自然風景などが見出された。また、人物が主格で登場する場合、自己が主体である記憶 (“私が〇〇した”等) と他者が主体である記憶 (“母が〇〇した”等) があることが確認された。さらに、自己が主体である記憶には、自己のみが含まれる記憶 (“私が〇〇した”等) と対象が含まれる記憶 (“私が母と〇〇した”等) があることが確認された。

必要な場合はカテゴリーを追加しつつ、次の 100 個、その次の 100 個と分析を進め、“自己が主体で、自己のみが含まれる記憶 (以下自己主体と呼ぶ)”、“自己が主体で、他者も含まれる記憶 (自己・他者)”、“他者が主体の記憶 (他者主体)”、“シーン”の 4 カテゴリーを確定した (Table 1)。なお、自己・他者に関しては、他者について下位カテゴリーを作成し、分類した。また“シーン”は人物が登場しない記憶をまとめたカテゴリーである。

この最終的なカテゴリー構成にもとづき、研究の目的を知らない 2 人のコーダーが想起された 1123 件のエピソードを独立に分類した。分類は排他的に、すなわち一つの記憶はいずれかのカテゴリーに一度のみ分

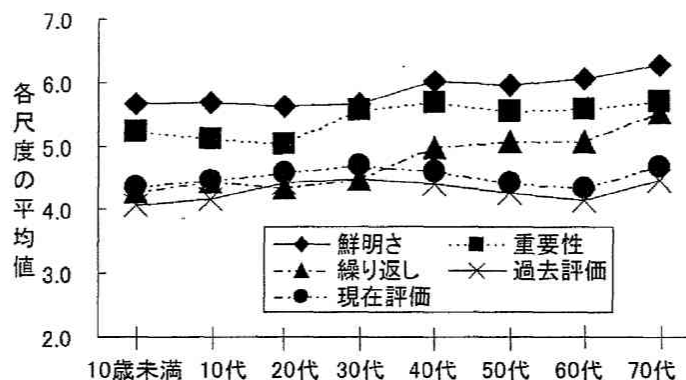


Figure 2. ライフスパンにおける各質問項目の平均値

¹ 本研究では、面談を数回に分けて行うので、データが均質でない可能性がある。このことを検討するために、各参加者から調査時期の早い順から 15 語に対する反応のみを抽出した分析を行った。参加者 18 人 (男性 12 人、平均年齢 70.3 歳 $SD = 6.05$ 、女性 6 人、平均年齢 74.0 歳、 $SD = 3.69$) のデータを資料とし、想起時期 (10 代、20 代、30 代、40 代、50 代) を独立変数とし、想起率を従属変数とする分散分析を行った。その結果全体を対象にした場合と同じ、時期の主効果が見られた ($F(4, 85) = 7.39, p < .001$)。さらに多重比較 (Tukey) を行ったところ、10 代は 30 代、40 代、50 代よりも想起率が有意 ($p < .05$) に高かった。

Table 1
各カテゴリーの分類基準

カテゴリーおよび下位カテゴリー	定義または例
自己が主体で、自己のみが含まれる記憶 (自己主体)	定義：行為の主体が自分であり、その行為が明示的である。 例：子どもの頃、神社に清掃に行って、たき火でやきいもを焼いた。
自己が主体で、他者も含まれる記憶 (自己・他者)	定義：記述中に他者が登場している。 (含意されている不特定な人との関係を含む)
家族	定義：記述中に家族や親族を含む。
母	例：母の日に自分の小遣いで、赤いカーネーションを贈った。
父	例：山に父と一緒に薪を取りに行き、背負って帰ってきた。
兄弟姉妹	例：妹のために、紙の着せ替え人形の洋服を作った。
その他の親族(祖父母等)	例：修学旅行の時、おじさんから時計をもらった。
配偶者	例：主人が九州に転勤になってホームシックにかかり大喧嘩になった。
子ども・孫	例：こどもの国に行き、息子をポニーに乗せて1周した。
友人・知人	定義：記述中に友人や知人を含む。
友人	例：友達に川に落とされたことがきっかけで泳げるようになった。
学校での他者(教師、先輩、後輩等)	例：中2の頃、成績が急に低下したために、先生に説教をうけた。
会社での他者(上司、部下、同僚等)	例：会社で書類で失敗したら、上司に叱られて嫌な思いをした。
その他	定義：記述中に上記以外の他者や動物を含む。
動物	例：隣の家の飼い犬がなついてきた。
他者が主体の記憶(他者主体)	定義：行為の主体が他者である。 例：息子が水泳大会で、中学の記録保持者になった。
シーン	定義：記述に自分の姿が入っていない記憶。
事物	定義：対象が具体的で個別な物体・事象である。 例：汽車の窓を開けていたら煙が吹き込んできた。
動物	定義：対象が動物である。 例：動物園に飼育員に顔をこすりつけている馬がいた。
植物	定義：描写対象が個別で小さい植物である。 例：サボテンの花が数年前から咲くようになった。
環境	定義：自分の周囲の環境についての言及。 例：街に出かけると都会は埃だらけだと思う。
社会	定義：社会的現象・事象に対する言及。 例：古新聞が高くなった時期があった。
自然風景	定義：全体的な自然の描写である。 例：生まれて初めて船に乗ったとき海が緑色に見えた。

類するという方法で行った。また、“妻”、“女房”、“連れ合い”といった単語は“配偶者”として同一カテゴリーに分類した。分類の一致率は85%であった($\kappa=.76$)。一致しなかった項目に関しては筆者らが適切だと判断した分類を採用した。

カテゴリー別に見た記憶の生起率 各カテゴリーの記憶を個人ごとにカウントし、その頻度を個人の総記憶個数で割った値を算出した。この値を個人の各カテゴリーの生起率とし、参加者全体の平均値を算出した。カテゴリーを独立変数とし、生起率を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、カテゴリーに有意な差が認められた($F(3, 96)=75.93, p<.001$)。多重比較(Tukey)の結果、生起率は自己主体が最も

高く(平均値 .53, $SD=.16$)、続いて自己・他者、シーン、他者主体という順であった(平均値と標準偏差は順に .29, $SD=.15$; .13, $SD=.08$; .05, $SD=.05$)($p<.01$)。

時期、カテゴリー別に見た記憶の生起率 各時期の各カテゴリーの記憶を個人ごとにカウントし、その頻度を個人の総記憶個数で割った値を時期、カテゴリーごとの生起率とした。参加者全体の平均値を Figure 3 に示す。

時期(10, 20, 30, 40, 50代)とカテゴリーを独立変数とし、二元配置の分散分析を行ったところ、時期の主効果($F(4, 446)=15.11, p<.001$)、カテゴリーの主効果($F(3, 445)=53.84, p<.001$)、および時期×

Table 2
各時期における自己・他者記憶に現れた人物の割合

対人関係の対象	時期							
	0-9 歳	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代
家族・親族	.67	.38	.19	.13	.15	.23	.33	.01
友達	.07	.14	.09	.05	.04	.09	.09	0
学校関係	.10	.14	0	0	.08	0	.03	.06
配偶者	0	.01	.31	.03	.19	.09	.09	.32
会社関係	0	.01	.03	.18	.04	.09	0	0
子ども・孫	0	0	.13	.40	.23	.27	.12	.23
その他	.17	.32	.25	.23	.27	.23	.33	.39

カテゴリーの交互作用が認められた ($F(12, 480) = 3.71, p < .001$)。時期の主効果に関して Tukey 法による下位検定を行ったところ、自己主体の生起率は 10 代が他の四つの時期よりも高く ($p < .05$)、自己・他者の生起率は 10 代が 40 代、50 代、20 代が 50 代よりも高かった ($p < .05$)。シーン、他者主体については時期による違いはなかった。

上の分析では、10 代、20 代における自己主体や自己・他者の記憶の生起率が高かった。しかしそれは、記憶の全体的な生起率が 10 代、20 代で高かったことによるのかもしれない (cf. Figure 1)。そこで、10 代、20 代で自己にかかわる記憶が特に高いのかどうかを調べるために、各時期において想起された記憶を 100 としたときの、自己主体、自己・他者、他者主体、シーンの割合を算出した。

その結果、自己主体の記憶が占める割合は、時期を通じてほぼ 50% であることが判明した (10 歳未満から 60 代まで順に 51, 52, 52, 47, 54, 58%)。また自己・他者の記憶の割合も、20 代、30 代で若干高い傾向はあるものの、概ね 2-3 割であった (順に 24, 27, 35, 37, 25, 22%)。つまり、バンプの時期は自己主体、自己・他者の記憶の生起率が高いものの、その時期の記憶に占める自己主体、自己・他者の記憶の割合は、他の時期に比べ特に高いわけではないといえる。むしろ、どの時期においても、自己主体、自己・他者の記憶がその時期の記憶の 75-87% を占めている。

時期、カテゴリーごとの記憶の特徴 時期、カテゴリーごとに Q1-Q5 への評価値を算出し、時期とカテゴリーを独立変数とする二元配置分散分析を行った。その結果、いずれの質問項目においても、時期の主効果、カテゴリーの主効果、交互作用は認められなかった。

“自己が主体で、他者も含まれる記憶 (自己・他者)” における他者 自己・他者の記憶は、自己主体に続き、多く見られた記憶であった。これらの記憶のなかにどのような他者が現れているのかを調べるために、時期、下位カテゴリーごとに個人の記憶をカウントし、自己・他者のみの総記憶個数に占める割合を算出した。(Table 2)。なお、Table 2 における“その他”には、近隣住民や旅行先で知り合った人などが含まれる。その結果、家族 (母、父、兄弟姉妹、その他の親戚、配偶者、子ども・孫) の記憶が占める割合は 10 代未満、10 代、20 代、30 代、40 代、50 代で、それぞれ 67, 40, 63, 55, 58, 59% であった。これに対し、知人・友人 (友人、学校での他者、会社での他者) の記憶が占める割合は、17, 29, 13, 23, 15, 18% であった。Holmes & Conway (1999) や Elnick et al. (1999) が示唆するように、他者が含まれる記

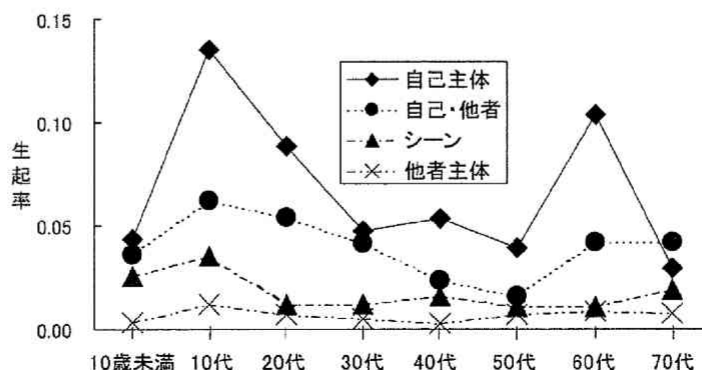


Figure 3. ライフスパンにおける各分類カテゴリーの生起率

憶であっても、その大半は家族との記憶であるといえるだろう。

各時期においてどのような人々が現れるかを見ると、家族では10代までは母親、20代では配偶者、30代以降は子ども・孫の割合が高い。現実には家族のメンバーは時間軸に沿って増加していくであろう。しかし想起される家族のメンバー数は単調増加せず、むしろ焦点化されたメンバー（高橋，1983）が選択的に想起された。また、友人・知人において、10代では友人、学校での他者が多く、30代では会社での他者が多かった。

シーンの下位カテゴリー 全体としての数は少ないが、シーンには事物、動物、植物、環境、社会、自然風景の六つの下位カテゴリーが見出された。シーンの記憶を分母とした各下位カテゴリーの記憶の割合は、事物39%、社会20%、自然風景20%、環境10%、植物6%、動物5%である。見たり、聞いたり、感じたりした対象である事物の記憶が一番多く、次いで社会的出来事、自然風景の記憶が多かった。

考 察

本研究では、手がかり語法によって想起された記憶について、(a)日本の高齢者にもパンプは見られるのか、(b)想起された記憶の特徴はどうか、(c)どのような内容の記憶が想起されるのかを調べ、パンプとそれ以外の時期の記憶を比較した。

その結果、まず、日本の高齢者においてもパンプが見られることが確認された。結果で見たとおり、そのピークは10代であった。ただし、60代、70代を分けてみると60代では10代のようにピークが見られるのに対し、70代では20代にもピークが見られる²（10代、20代の生起率は60代では26%、8%であるのに対し、70代では21%、16%である）。70代の人の20代は第2次世界大戦の時期と概ね重なる。Conway & Haque (1999) や Schrauf & Rubin (1998) は、内戦や移民などの重大な出来事とパンプに関連があることを示している。「戦争」や「空襲」等の言葉が用いられない限り、想起された記憶が戦争とかかわっているのかどうかを伺い知ることは難しい。しかし、背後にある戦争体験が記憶の想起数の増加と関係している可能性も否めない。

次に、記憶の特徴に関する質問項目への回答を見る

² 世代（60,70歳代群）および時期を要因とし、想起の生起率を従属変数とする分散分析の結果、時期の主効果が認められたが（ $F(4, 92) = 11.39, p < .001$ ）、世代の主効果が認められなかった（ $F(1, 23) = 0.38, ns$ ）。また世代と時期の交互作用が認められた（ $F(4, 92) = 3.08, p < .05$ ）。また、60歳代群、70歳代群それぞれにおいて、時期を独立変数とし、想起の生起率を従属変数とする分散分析を行った結果、60歳代群、70歳代群の両方で時期の主効果に有意な差が認められた（ $F(4, 45) = 9.16, p < .001$; $F(4, 65) = 5.18, p < .001$ ）。

と、パンプの記憶は重要度、鮮明度、想起の繰り返しの程度、過去・現在の評価において、他の時期の記憶と特に異なるものではないことが示された。この結果は、先行研究の結果と一致する（Jansari & Parkin, 1996; Rubin & Schulkind, 1997a）。手がかり語法を用いると、それまでほとんど思い出さなかった些細な記憶が思い出されることがあるという。また、瑣末な周辺の記憶が想起されることも多いといわれる（Rubin et al., 1998）。本研究においても、重要度の評定値が低かったことから同様のことが生じたと考えられる。パンプの時期も、それ以外の時期も、重要度や鮮明度といった点では、同質の記憶が想起されていることが伺われる。

第3に、想起された記憶の約5割は自己が主体であり、自己のみしか含まれない記憶であること、また2-3割は自己と他者が含まれる記憶であることが示された。少なくとも手がかり語法によって引き出される記憶の大半は、自己を中心とした、私的で個人的な記憶だといえよう。

記憶の生起率を時期別に見ると、Elnick et al. (1999) や Holmes & Conway (1999) が示唆するように、自己主体や自己・他者の記憶は10代、20代が多かった。各時期における記憶を100として自己主体、自己・他者、その他の記憶の割合を算出すると、自己主体にも自己・他者にも大きな違いはなく、これら2種の記憶が各時期の75-87%を占めていた。このことから、パンプの記憶は他の時期の記憶と特に異なるものではないことが示唆される。

パンプが生じるメカニズムについては、認知、社会発達の視点からさまざまな説明がなされている（Berntsen & Rubin, 2002）。(a)記憶の新奇性による説明によれば、10代、20代は進学、就職、結婚等、新奇性や示差性が高い出来事が多いため、記憶が保持されやすく、パンプが形成される（Chu & Downes, 2000; Jansari & Parkin, 1996; Schrauf & Rubin, 1998）。(b)アイデンティティ説によれば、10代、20代はアイデンティティが確立する重要な時期であるので、その時期の出来事はより多く符号化・保持され、パンプが形成される（Conway & Pleydell-Pearce, 2000; Holmes & Conway, 1999）。これらの説が符号化や保持を重視するのに対し、(c)ライフ・スクリプト説は、記憶の検索にかかわる文化的要因の影響を重視している。ライフ・スクリプトとは、文化的規範や典型的なライフコースの内容やその順序に関する期待についての知識である。この説によれば、特定の移行的（transitional）出来事は、特定の年齢範囲内で起きることが期待される。特に10代、20代では多くの移行的出来事が検索されるため、パンプが生じると主張されている（Berntsen & Rubin, 2002; Rubin & Berntsen, 2003）。

以上の三つの説は、青年期に生じやすい出来事（新奇な出来事、自己の確立とかかわる出来事、移行的出来事）が、バンプと関連すると仮定している。これに対し、(d)生物学的説明によれば、10代、20代はヒトの認知的なパフォーマンスが最も優れている時期であるため、その期間は多くの情報が符号化され、貯蔵されるのだと仮定している（Schrauf & Rubin, 1998）。

本研究では、10代、20代、30代、40代、50代における自己主体の記憶の割合はそれぞれ約50%であって、10代、20代において自己に関する記憶が多いうわけではなかった。この結果は、10代、20代は貯蔵される記憶の全体量が大きいだけだとする生物学的説明を支持しているように思われる。

ただし、“自己が主体で、他者も含む記憶（自己・他者）”における他者に対する分析によれば、10代までは母親、20代では配偶者、30代以降では子ども・孫へと、相手となる他者が時期によって変化していた。また、記憶に含まれる知人や他者は、10代では友人や学校での知人が、30代では会社での知人が多かった。このような変化は、新しい出会いや環境という新奇性によって生じているのかもしれないし、自己の確立やライフ・スクリプトを反映しているのかもしれない。少なくとも、バンプを生物学的説明だけで理解することは難しいように思われる。Berntsen & Rubin (2002) や Rubin et al. (1998) が示唆するように、バンプは単一の要因ではなく、複数の要因が組み合わさって生じる現象なのであろう。しかし一方で、以上の諸説が、交絡している可能性も指摘できる。上で考察したように、生物学的ピークである時期（10代、20代）に生じる出来事は新奇であることが多く、同時に、自己にまつわる重要なライフ・スクリプトを構成している可能性もあるだろう。

今後の課題としては、新奇性、自己の確立、ライフ・スクリプトといった概念を操作的に定義し、概念的交絡を解決していくことが必要である。例えば、参加者に想起された出来事の新奇性を評定してもらうだけでなく、本人にその内容をライフ・スクリプトに対応づけてもらうなどの工夫が有効かもしれない。

引用文献

- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic and involuntary memories. *Psychology & Aging, 17*, 636-652.
- Chu, S., & Downes, J. J. (2000). Proust nose best: Odors are better cues of autobiographical memory. *Memory & Cognition, 30*, 511-518.
- Cohen, G., Conway, M. A., & Maylor, E. A. (1994). Flashbulb memories in older adults. *Psychology & Aging, 9*, 454-463.
- Cohen, G., & Faulkner, D. (1988). Life span changes in autobiographical memory. In M. M. Gruneberg & P. E. Morris (Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues*, Vol. 1. *Memory in everyday life*. New York: John Wiley & Sons. pp. 277-282.
- Conway, M. A., & Haque, S. (1999). Overshadowing the reminiscence bump: Memories of a struggle for independence. *Journal of Adult Development, 6*, 35-44.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review, 107*, 261-288.
- Crovitz, H. F., & Schiffman, H. (1974). Frequency of episodic memories as a function of their age. *Bulletin of Psychonomic Society, 4*, 517-518.
- Elnick, A. B., Margrett, J. A., Fitzgerald, J. M., & Labouvie-Vief, G. (1999). Benchmark memories in adulthood: Central domains and predictors of their frequency. *Journal of Adult Development, 6*, 45-59.
- Fitzgerald, J. M. (1988). Vivid memories and reminiscence phenomenon: The role of self narrative. *Human Development, 31*, 261-273.
- Galton, F. (1879). Psychometric experiments. *Brain, 2*, 149-162.
- Holmes, A., & Conway, M. A. (1999). Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development, 6*, 21-34.
- Jansari, A., & Parkin, A. J. (1996). Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology & Aging, 11*, 85-91.
- 小川嗣夫・稲村義貞 (1974). 言語材料の所属性の検討——名詞の心像性・具象性・意味度および学習容易性—— *心理学研究, 44*, 317-327.
- (Ogawa, T., & Inamura, Y. (1974). An analysis of word attributes imagery, concreteness, meaningfulness and ease of learning for Japanese noun. *Japanese Journal of Psychology, 44*, 317-327.)
- Robinson, J. A. (1976). Sampling autobiographical memory. *Cognitive Psychology, 8*, 578-595.
- Rubin, D. C., & Berntsen, D. (2003). Life scripts help to maintain autobiographical memories of highly positive, but not highly negative, events. *Memory & Cognition, 31*, 1-14.
- Rubin, D. C., Rahhal, T. A., & Poon, L. W. (1998). Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition, 26*, 3-19.
- Rubin, D. C., Schrauf, R. W., & Greenberg, D. L. (2003). Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition, 31*, 887-901.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. (1997a). Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-, 35-, and 70-year-old adults.

- Psychology & Aging*, **12**, 524-535.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. (1997b). The distribution of autobiographical memories across the lifespan. *Memory & Cognition*, **25**, 859-866.
- Rubin, D. C., Wetzler, A. E., & Nebes, R. D. (1986). Autobiographical memory across the lifespan. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 202-221.
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶 井上 毅・佐藤浩一 (編著) 日常認知の心理学 北大路書房 pp. 70-87.
(Sato, K.)
- Schrauf, R. W., & Rubin, D. C. (1998). Bilingual autobiographical memory in older adult immigrants: A test of cognitive explanations of the reminiscence bump and the linguistic encoding of memories. *Journal of Memory & Language*, **39**, 437-457.
- Schuman, H., & Scott, J. (1989). Generations and collective memories. *American Sociological Review*, **54**, 359-381.
- 高橋恵子 (1983). 対人関係 波多野完治・依田 新 (監) 児童心理学ハンドブック 金子書房 pp. 607-639.
(Takahashi, K.)

——2004. 8. 5 受稿, 2006. 5. 7 受理——